３．教科に関する調査の各問題の分析結果と課題

（１）「３．教科に関する調査の各問題の分析結果と課題」の見方

調査問題について、出題の趣旨、学習指導要領における目標、領域・内容、評価の観点、解答類型と反応率、分析結果と課題、学習指導に当たってなどを記述しています。

問題画像

調査問題を縮小して掲載しています。

出題の趣旨

問題ごとに出題の意図、把握しようとする力、場面設定などを記述しています。

趣旨

設問ごとの出題の意図、把握しようとする力などを記述しています。

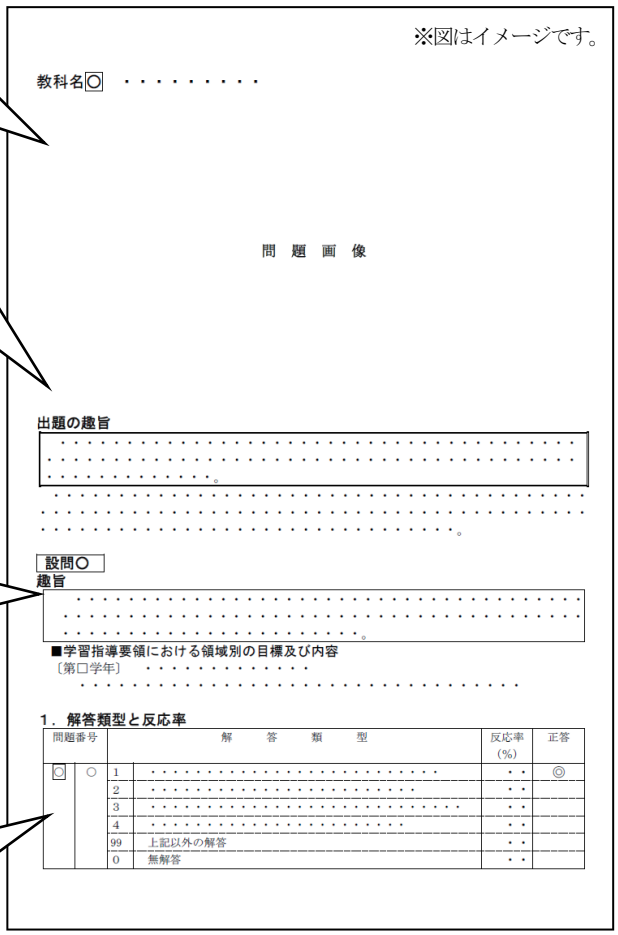
■学習指導要領における目標、領域・内容

調査対象学年及び他の学年の児童生徒への学習指導の改善・充実を図る際に参考となるように、関係する学習指導要領における領域別の目標及び内容を示しています。

■評価の観点

１．解答類型と反応率

解答類型ごとの反応率、正答の条件を示しています。（詳細は下欄参照）



解答類型と反応率

解答類型は、児童生徒一人一人の具体的な解答状況を把握することができるように、設定する条件等に即して解答を分類、整理したものです。正誤だけではなく、児童生徒一人一人の解答の状況（どこでつまずいているのか）等に着目した学習指導の改善・充実を図る際に活用することができます。

＜正答＞

「◎」… 解答として求める条件を全て満たしている正答

「○」… 問題の趣旨に即し必要な条件を満たしている正答

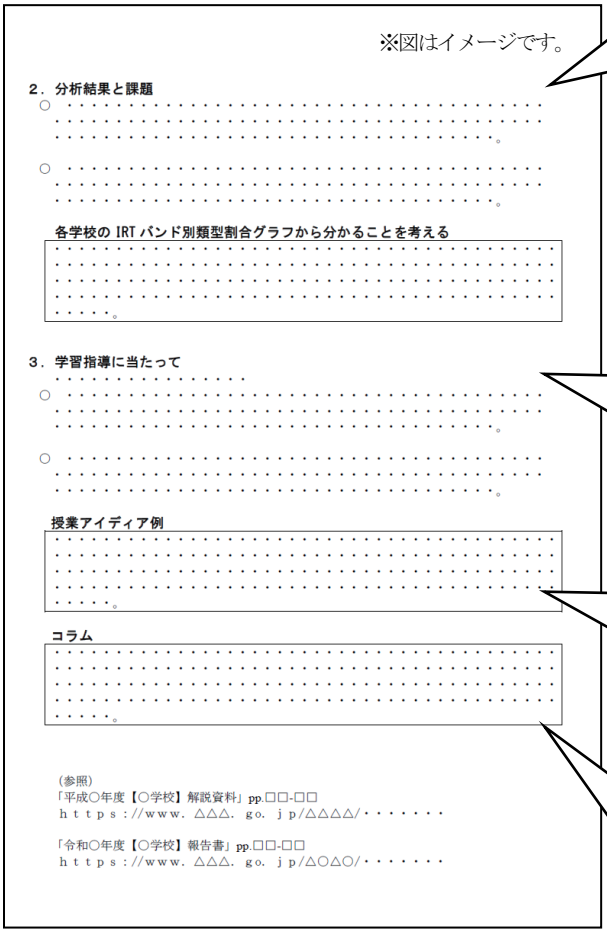
※反応率は小数第二位を四捨五入したものであるため、「◎」と「○」の反応率の合計と正答率が一致しない場合や合計が 100%にならない場合があります。クロス集計についても同様です。

※英語「聞くこと・読むこと・書くこと」の３技能については、４月 20 日（月）～４月 24 日（金）、英語「話すこと」については、４月 24 日（金）～４月 27 日（月）に調査を受けた全国の生徒の反応率を示しています。

分析結果と課題

問題ごとに、以下の内容について記述しています。

- 正答率、課題の有無
- 特徴的な解答について、反応率、解答例、課題の詳細
- これまでの調査で見られた課題との関連　　など



２．分析結果と課題

正答率、課題の有無、特徴的な解答の分析、これまでの調査で見られた課題との関連などを記述しています。
（詳細は前ページの下欄参照）

・分析方法①（思考発話調査）

一部の児童生徒に考えを発話しながら問題を解いてもらい、解答に至るまでの思考過程を分析しています。

・分析方法②（IRT バンド別類型割合グラフから分かることを考える）

自校の IRT バンドの分布や全国的な傾向との比較を通して、授業改善を考える際に参考となる情報を示しています。

３．学習指導に当たって

調査結果を受け、学習指導の改善・充実を図る際のポイントを問題ごとに記述しています。（詳細は下欄参照）

授業アイディア例

授業の改善・充実を図る際の参考となるよう、授業アイディアの一例を示しています。

コラム

調査問題に関連する内容について、学習内容の系統性や既習事項との関連などを解説し、学習指導の改善・充実を図る際に参考となる内容を記載しています。

学習指導に当たって（授業アイディア例含む）

調査問題に関係する領域別の目標及び内容について、各学年での日々の学習指導の改善・充実を図る際に「解説資料」（本年４月公表）と併せて御活用ください。

また、令和４年度から、授業の改善・充実により資するよう、これまで別途作成していた「授業アイディア例」を報告書に掲載し、調査結果の課題分析と課題の解決を図る事例を一体的に示すこととしました。

なお、関連する過去の調査の報告書や授業アイディア例など、これまで作成した資料の該当ページを記載していますので、これらの資料も併せて御活用ください。

本書では、以下の資料については略称を用いています。

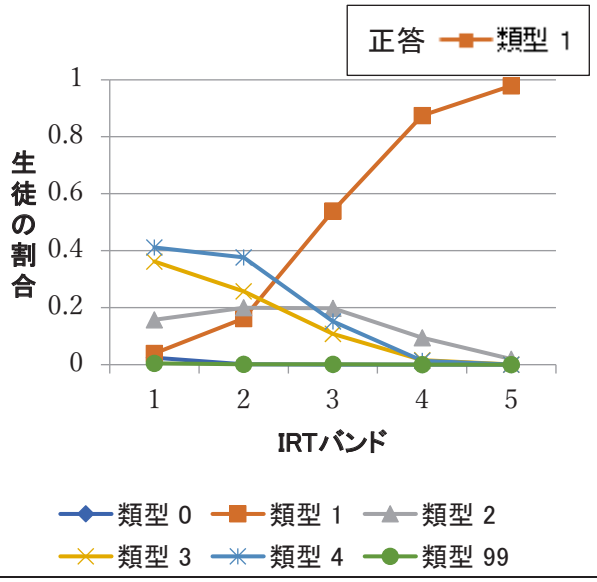
資　　料	略　　称
「平成○年度　全国学力・学習状況調査　解説資料　○学校　○○」	「平成○年度【○学校】解説資料」
「平成○年度　全国学力・学習状況調査　報告書　○学校　○○」	「平成○年度【○学校】報告書」
「平成○年度　全国学力・学習状況調査【○学校】の結果を踏まえた授業アイディア例」	「平成○年度【○学校】授業アイディア例」
「平成○年度　全国学力・学習状況調査結果を踏まえた学習指導の改善・充実に関する指導事例集」	「平成○年度【中学校英語】指導事例集（映像資料）」 「平成○年度【中学校英語】指導事例集（指導資料）」

IRT バンド別類型割合グラフ(IRT バンドに基づいた G-P 分析図)の見方について

令和８年度中学校英語では、IRT バンドごとに解答状況や傾向に特徴が見られた設問において、IRT バンドごとの解答類型別生徒割合を、IRT バンド別類型割合グラフ(IRT バンドに基づいた G-P 分析図※)で示します。なお、本報告書の IRT バンドは、「聞くこと・読むこと・書くこと・話すこと」の英語４技能を統合した IRT スコアに基づくもので、「話すこと」の当日実施校（46,645 人分）のデータより全国値を算出しています。

（※）G-P 分析図（Good-Poor Analysis）とは、調査実施生徒の学力レベルを分類して、段階ごとに解答パターンがどれくらいの比率でいるかを示したものです。本報告書では、横軸は受検者の学力レベル（5 段階の IRT バンド）を表し、縦軸は IRT バンドごとの各解答類型に属する生徒の割合を表しています。

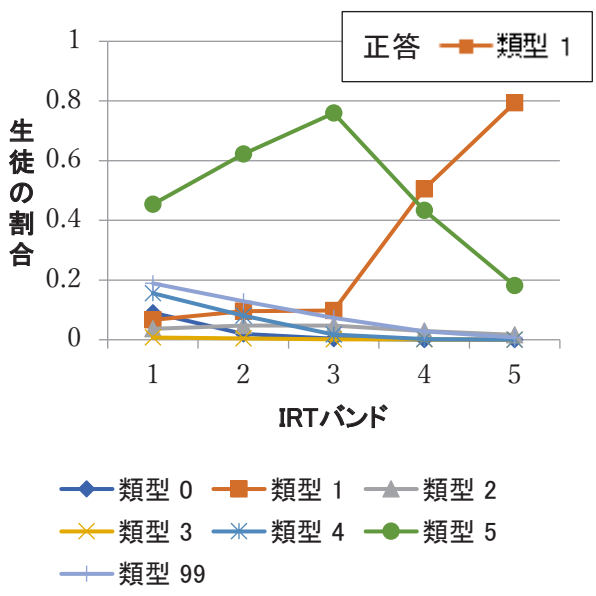
例①



正答となる類型１の折れ線グラフをみると、IRT バンド４に属する生徒の約８割が正答していることが分かります。一方で IRT バンド１、２に属する生徒は正答率が２割に届かず、一定の割合で類型３または４と解答し、誤答になっていることが分かります。

→本問題においては、誤答となる類型３、４の内容を分析することで、IRT バンド１、２に属する生徒の課題を把握し、当該バンドの生徒に対して指導すべき事柄を理解することができます。

例②



正答となる類型１の折れ線グラフをみると、IRT バンド１～３に属する生徒は正答率が２割未満にとどまっており、正答以外の解答をした生徒にとって、課題のある状況が推測されます。また、IRT バンド１～３に属する生徒において類型５の誤答の割合が４割以上であることがわかります。

→本問題においては、誤答となる類型５の内容を分析することで、IRT バンド１～３に属する生徒の課題を把握し、当該バンドの生徒に対して指導すべき事柄を理解することができます。